

第Ⅶ章 考察

1 終末期古墳出土の土製棺台について

(1) はじめに

前章でもふれたように平野2号墳からは埴と棺の受台¹⁾が出土しており、この2者の土製品を組み合わせて棺台を構築して棺(柩)が埋葬されている可能性を指摘した。このような埋葬形態をもつ古墳は、現在知り得た範囲では全国的に見ても同じ二上山麓に位置する平野2号墳と大阪府塚廻古墳出土緑釉陶棺²⁾の2例を知るのみであり、これ以外に国内では類例はなく、実に特殊な棺台であると言える。

以前、これらの二上山麓の終末期古墳から出土する2者の土製の棺台について比較・検討を行った³⁾が、その後の新しい知見もふまえて本頁にて改めて検討することとする。

(2) 塚廻古墳出土緑釉陶棺について

①塚廻古墳の概要

二上山西麓の磯長谷には向山古墳(用明陵)や山田高塚古墳(推古陵)をはじめ、上ノ山古墳(孝徳陵)、上城古墳(聖徳太子墓)などの天皇・皇族級の墳墓が集中している。この磯長谷の古墳群の南方の葛城山西麓にあたる大阪府南河内郡河南町平石には数基の古墳からなる平石古墳群が分布している。

平石古墳群は、石川流域に沿う台地に向かって開析した狭い平石谷の南向きの丘陵傾斜面の中腹に位置しており、約200~400mの間隔をおいて西からシシヨツカ古墳、アカハゲ古墳、塚廻古墳などの7世紀代の数基の終末期古墳が営まれている。

アカハゲ古墳の主体部は、花崗岩の切石で構築した横口式石槨で、漆塗籠棺の破片とガラス製扁平管玉をはじめ、褐釉円面硯等⁴⁾が出土している。

シシヨツカ古墳は、近年の調査で東西約34m、南北約26m、高さ約5mの三段築成の横長の方墳であることが確認されている。主体部は、奥室・前室・羨道からなる横口式石槨で、須恵器の帰属時期から従来の横口式石槨の初現の年代観を大きく遡る6世紀後半の築造と推定されている。横口式石槨内からは、漆塗籠棺をはじめ、亀甲繫単鳳凰文銀象嵌円頭大刀柄頭、銀装刀子、挂甲小札、金銅装馬具、銀製帶金具、金糸、銀糸、ガラス玉等の豪華で多彩な遺物⁵⁾が出土している。

塚廻古墳は、奥室と前室、羨道で構成される横口式石槨で、全長7.65mを測る。奥室は、長さ2.4mで、幅・高さともに1.32mを測る。天井と側壁、床面は平滑に加工された花崗岩の切石をそれぞれ1石ずつ組み合わせて構築しており、奥壁の隅角部には白色の漆喰が施されている。

前室は、奥室よりも大きく、長さ約4.7m、幅・高さともに約1.6mを測る。表面を平滑に整形した花崗岩の切石を3個ずつ布積みしており、床面には地山上に一辺30~40cm、厚さ3~5cmの方形または長形状に加工した奈良県宇陀郡室生村や榛原町で産出する通称「榛原石」の板石を二重に敷いている。奥室と前室との間には二上山西方に分布する安山岩を加工した高さ約1.5m、幅約1.6m、厚さ25cmの方形板の扉石が仕切石として嵌め込まれた状態で検出されている。前室の

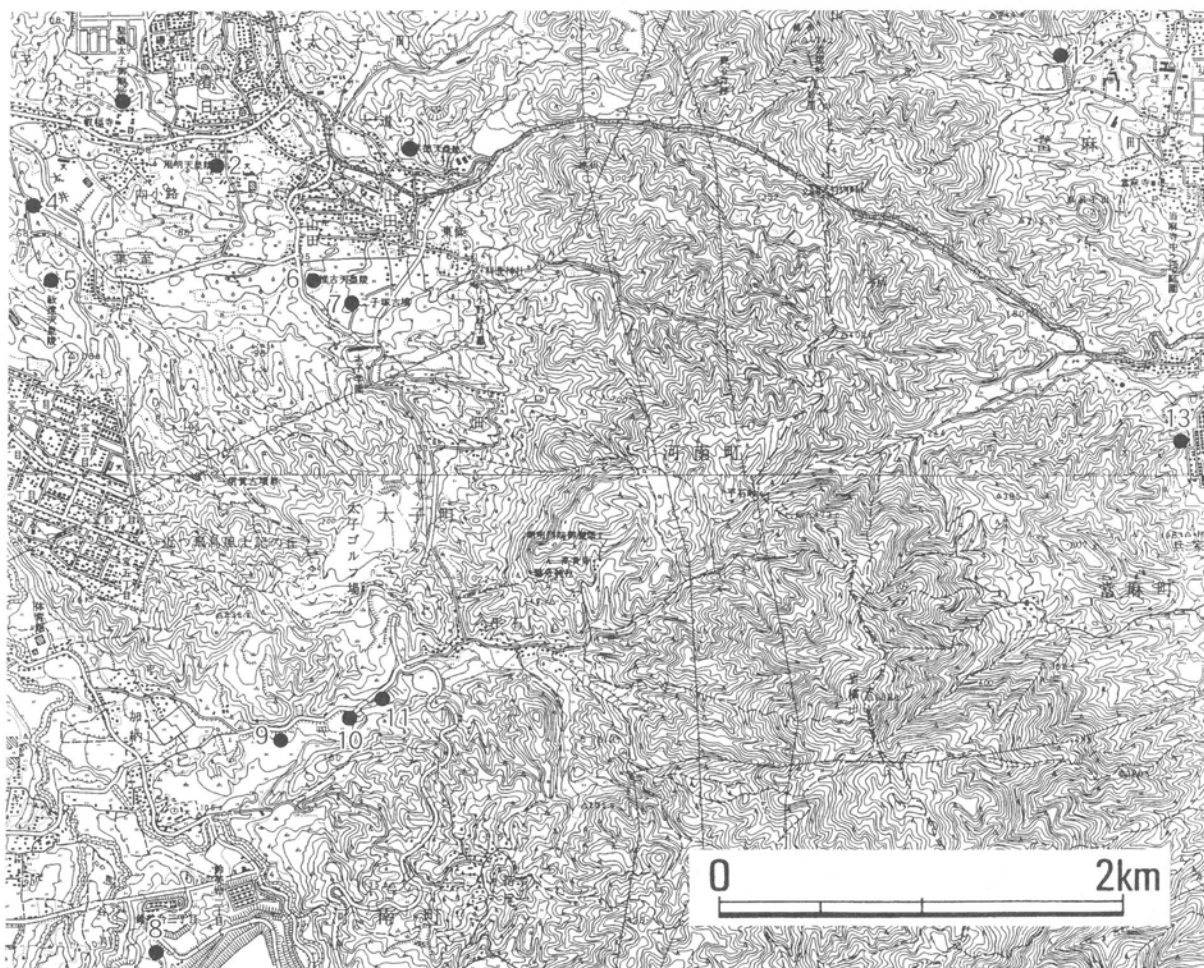
先端部から羨道にかけては人頭大の石を多数積み上げて閉塞しており、閉塞石の間に木製の板扉を挟んで立てて石室内部を閉塞していた可能性があることが指摘されている。⁶⁾

最近実施された墳丘部の発掘調査で、東西の幅約80m、南北約45m以上の盛土で構築した巨大な壇の上に、一辺が下段43m、中段35m、上段23mの3段構造で墳丘が築かれており、壇と墳丘を合わせて高さ11mを測る国内でも最大級の大型方墳であることが確認されている。出土土器等から従来考えられてきた年代観よりもやや古い7世紀中頃の築造と考えられている。⁷⁾

横口式石槨内は徹底的に盗掘されていたため、原位置を保った遺物はないが、前室を中心に金製小コイル状金具7個、金糸残欠10本、金銅金具残欠約30本、七宝飾銀製刀子飾金具2個、ガラス管玉破片15片、ガラス丸玉破片5片、金象嵌鉄刀片22片、緑釉陶製棺台片約100片、瓦器碗1点、破片10片、寛永通宝銭10枚等多数の遺物が出土している。

この他に、塚廻古墳の棺材と推定される部材として、約500片以上の漆塗籠棺と夾紵棺の2種類の漆塗製品の破片が出土している。

塚廻古墳から出土した漆塗籠棺破片・夾紵棺を巡る解釈については、調査担当者の北野耕平氏は下記のとおりの見解を示されている。⁸⁾



- | | | | |
|-----------------|-------------------|------------------|-----------|
| 1. 上城古墳 (聖徳太子墓) | 2. 向山古墳 (用明天皇陵) | 3. 上ノ山古墳 (孝徳天皇陵) | 4. 伽山古墳 |
| 5. 奥城古墳 (敏達天皇陵) | 6. 山田高塚古墳 (推古天皇陵) | 7. 二子塚古墳 | 8. 白木古墳 |
| 9. シシヨツカ古墳 | 10. アカハゲ古墳 | 11. 塚廻古墳 | 12. 鳥谷口古墳 |
| | | | 13. 兵家古墳 |

図71 塚廻古墳周辺の古墳分布

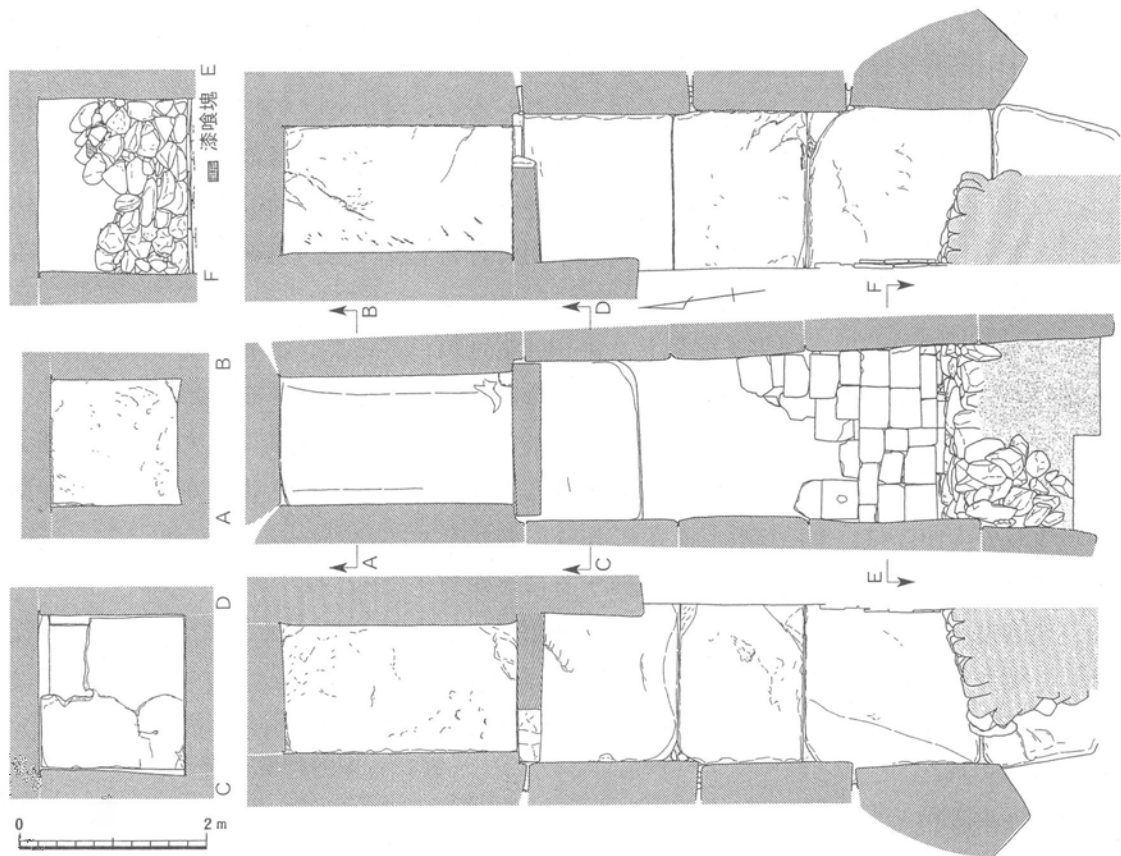


図72 塚廻古墳横口式石槨実測図（S=1/80）

「被葬者の遺体を収めた特異な棺容器である。残念なことに盗掘に際してバラバラに粉碎されたりしく、破片として発見された。大きな破片で10cm角にすぎず、小片も含めて500片以上ある。破片から棺体の規模、形状を復原するのは困難であるが、本来は長方形箱形の棺身であったと推定できる。後述する緑釉陶製棺台を漆塗籠棺が収納された外容器と考えた場合、内法が長さ182cm、幅61cmあるので籠棺の平面の大きさはこれ以内、高さは40～50cm内外の規模を想定できよう。

漆塗籠棺とは終末期古墳の時期に畿内を中心として流行した漆製棺の一種である。他に乾漆棺・夾紵棺・漆塗陶棺・漆塗石棺などがある。この種漆製棺は地域的には奈良県飛鳥・同西部・大阪府南東部・同北部の阿武山に集中する。漆塗籠棺は内部に植物質の繊維を編みこんで箱状のものを作り、その表裏両面に厚く漆を塗り固めたもので、外面は黒褐色であるが、内面にはさらに鮮やかな朱漆を塗って仕上げている。

基体となる編組品には幾つかの仕様があるようで、角山幸洋氏によると香芝市平野塚穴山古墳出土の資料は「三ツ組」を基礎としたものとする考察がある。塚廻古墳の籠棺破片の外面が剥離した例を見ると、太い撚紐を横に並べて緯とし、細い撚紐を交互に上下に通して経とした蓆編のごとき基体であるが、細部の技法は今後の検討を待ちたい・・・。

この種漆塗籠棺の類例は奈良県香芝市平野塚穴山古墳の1例を除くと、現在までに判明している3例の出土地は、ことごとく大阪府南東部の平石谷に集中している。すなわち、塚廻古墳・アカハゲ古墳・シシヨツカ古墳に限られているので、極めて使用者の限られた製品といえる・・・。

漆塗籠棺は厚さ1cmに近く、要所に棧を配して棺体の強化を計っている。これに対して厚0.3cmというごく薄い夾紵を漆塗した遺物がある。量的には籠棺と比べると少なく、かつ細片であるが、いずれも薄い平板状をなしていて屈折した角部を持たない。強いてこの用途を推測すると棺蓋として用いられたものであろう。木板の上に貼り付けて使用することも可能であるが、現存する夾紵片には木質の付着はない。いずれにしても棺体の一部にのみ夾紵の製品を用い、棺体自体は籠の内外面に漆塗した容器であるとする、奈良県明日香村牽牛子塚古墳例の夾紵棺に比べると身分差を思わせる・・・。」

香芝市二上山博物館が平成14年に開催した第18回特別展に伴って、漆塗籠棺と夾紵棺と推定される2つの漆塗製品を詳細に観察したところ、新たに幾つかの知見を得ることができた。

まず、漆塗籠棺と推定される漆塗製品は、平均的に厚さは約1cm前後で、大別して、屈曲した角を持たない平坦なものと、平坦面の一方に屈曲した角を持つものの2種類があることが識別でき、平坦なものの中には、要所に棧を配して棺体の強化を計るためか、一方の面に幅約1.5cmの棧状の突起部を設けるものがあることを再確認することができた。

また、夾紵棺と推定される漆塗製品は、漆塗籠棺に比して厚さ約0.3cmと器壁が薄く、漆塗籠棺と同様に、屈曲した角を持たない平坦なものと、平坦面の一方に屈曲した角を持つものの2者があることが識別でき、さらに、これ以外にも僅か1例であるが、棺の端部（縁辺部）と推定される部材も認められた。

表10 国内の漆塗棺一覧

種 類	古 墳 名	時 期	所 在 地
夾 紵 棺	天武・持統陵古墳 (野口王墓古墳)	————	奈良県高市郡明日香村
	牽牛子塚古墳	7世紀末	奈良県高市郡明日香村
	平野塚穴山古墳	7世紀中～後半	奈良県香芝市
	聖徳太子墓 (叡福寺北古墳)	7世紀前半	大阪府南河内郡太子町
	塚廻古墳	7世紀中頃	大阪府南河内郡河南町
	阿武山古墳	7世紀後半	大阪府高槻市
	八幡山古墳	7世紀中～後半	埼玉県行田市
	安福寺蔵品	————	大阪府柏原市
漆塗木棺 (木芯漆塗棺)	石のカラト古墳	7世紀後半	奈良県奈良市山陵町
	高松塚古墳	7世紀末	奈良県高市郡明日香村
	マルコ山古墳	7世紀末	奈良県高市郡明日香村
	束明神古墳	7世紀末	奈良県高市郡高取町
	御嶺山古墳	7世紀後半	大阪府南河内郡太子町
	初田2号墳	7世紀末	大阪府茨木市
	岩内1号墳	7世紀後半	和歌山県御坊市
	八幡山古墳	7世紀中～後半	埼玉県行田市
漆塗籠棺	平野塚穴山古墳	7世紀後半	奈良県香芝市
	アカハゲ古墳	7世紀中頃?	大阪府南河内郡河南町
	塚廻古墳	7世紀中頃	大阪府南河内郡河南町
	シシヨツカ古墳	6世紀後半	大阪府南河内郡河南町
漆塗陶棺	御坊山3号墳	7世紀前～中葉	奈良県生駒郡斑鳩町
漆塗石棺	菖蒲池古墳	7世紀前半	奈良県橿原市

漆塗籠棺と夾紵棺とも明確な形状や規模は不明であるが、これらの部材が組み合わさって長方形の棺状の形状を成していたことが推察できる。

2者の漆塗棺の中でも、器体の厚い漆塗籠棺が棺身とすると、物理的に器体の薄い夾紵棺は棺蓋として使用されていたものと推定される。

表10のとおり、このような7世紀代の飛鳥時代の古墳から出土する漆塗棺は、奈良県や大阪府を中心に全国で約20例が確認されている¹⁰⁾。

一基の古墳の石室内から出土する漆塗棺材は、基本的に1種類のみであり、漆塗棺の中でも漆塗籠棺の夾紵棺等の2種類の複数の漆塗棺を一对として使用する例は、全国的に見ても同じ二上山麓に位置する平野古墳群中の平野塚穴山古墳¹¹⁾と塚廻古墳の2例以外には類例は見られず、両者は棺材の構成・使用方法について何らかの関連性が予測される。

②塚廻古墳緑釉陶棺（棺台）について

塚廻古墳出土の緑釉陶棺については、北野耕平氏は下記のとおり¹²⁾の見解を示されている。

「長さ約1.9m、幅約72cm、高さ21cmの長方形の平たい受台状をした土製品である。厚さは底面が約2.7cm、側面は垂直に立ち上がって上縁は厚さ2.3cmとなる…。製作にあたって底部に刻線による割付けを行い、支脚を一時的に接合していることが判明した。陶製棺台の胎土は淡褐色の粘土を硬質に焼成したもので、焼成後表面を磨研調整した後、緑釉を施して再度低火度で焼成している。緑釉は内面の四壁と底部上面、および外側面に施している。緑釉は、ほとんどが淡青色を呈する薄さであるが、内壁の下方は釉薬が厚く溜ったため濃い緑色を呈する。底面の下側には施釉はない。底面には長辺に平行して四本、短辺には七本の割付けした直線が碁盤目状に部分的に残り、その間隔は約20cmある。この直交する部分には、直径8cm内外の粘土製の円柱を貼付けていた圧痕がある。圧痕からみると円柱は中実で管状をしていない。おそらく焼成にあたって棺台底部を窯体の床面に直接据えずに計28本の支脚で支えて、焼成後脚を切断したものとみられる。施釉の陶製棺台は奥室中央に据えられ、内部に漆塗籠棺を安置したのであろう。本来籠棺は器胎が薄いため、それを保護する受台として焼成されたものであろう。棺台の据え方としては内部の凹面を下にして、台状においてその上に漆塗籠棺を載せる方法が考えられる。しかし、本古墳の場合、施釉は内部の凹面にもあって底面の下側には緑釉を認めないので、棺台は受台としての機能を有したと判断した。」

平成14年に開催した香芝市二上山博物館第18回特別展に伴って、改めて緑釉陶棺の器体表面の採拓を行い、平面図と断面図の実測図面を作成するなど詳細に観察する機会を得た¹³⁾（図73）。

規模や形態的な特徴は、上記の通りであり、調整は、内外面とも全体的に原体幅約4cmの比較的丁寧なハケ調整が施されている。

緑釉が施されているということ以外に注目すべきこととしては、緑釉陶棺の底部裏面の数箇所にみられる脚の剥離痕があげられる。この剥離痕を詳細に観察すると、幅2mmの線刻があり、その交点に直径8cm、内径5cmの脚台が貼り付けられている¹⁴⁾。脚は、調整の状況から緑釉陶棺底部外面のハケ調整を施した後に設置されており、また、接合の方法も脚の基部を粘土で完全に塗り固めて貼り付けるのではなく、一時的に仮に貼り付けられたような状況を呈している。

したがって、脚は、横口式石槨の奥室内に棺を収納する際に高さの問題で収納できないことなどの不具合が生じたために緑釉陶棺本体から外されたのではなく、もともと、緑釉陶棺の焼成のためだけに付けられたものと解釈できる。

また、今回の実測図作成に伴って緑釉陶棺を詳細に観察したところ、底部内面の数カ所にわたって漆塗籠棺と推定される漆状の塗膜痕が付着しているのを確認することができた。

漆状の塗膜痕は、全面的に付着しているのではなく、比較的、緑釉陶棺の側板の基部（立ち上がり部）に沿って数カ所に部分的に遺存している。とくに、底部内面に直行して付着する漆膜痕は、漆塗籠棺の棧部の幅とほぼ等しいことから、長年にわたって緑釉陶棺の中に安置されていた漆塗籠棺の棧部の痕跡と推定される。塗膜痕は、緑釉陶棺の内側から数cm間隔を空けて余裕を持って付着しているのではなく、比較的、側板基部に沿って付着していることから、漆塗籠棺は、ほぼ、緑釉陶棺の形状・規模と近似している可能性が強く、本来の大きさは緑釉陶棺の規模から数cm程度短い大きさになるものと推定される。

緑釉陶棺に付着していた塗膜痕が漆塗籠棺と同一の成分の漆であるとするならば、予想通り、緑釉陶棺の中に夾紵棺を棺蓋として漆塗籠棺を棺身とする2種を一对とする漆塗棺が収納されていたことを示す重要な証拠になるものと思われるが、この点は、今後、将来の科学的分析による研究成果の進展に委ねたい。

(3) 平野2号墳出土棺の受台について

平野2号墳出土棺の受台については、第Ⅳ章3(2)で詳述している¹⁵⁾ので、ここでは、要点のみ再録することとする。

棺の受台の破片は、一辺に側面を持ち、L字形を呈するものと、一方の端部が面取りされたものの2者に分けられ、これらの破片を繋ぎ合わせると、三辺は側面を持ち、一辺は側面を持たずに端面を持つ49.5cm×72cmの大きなひとまとまりの部材を復元することができた(以下、第1区と呼ぶ)(図53・74、写真64、図版83・84)。棺の受台は、第1区のようなまとまりを一単位として、3つの単位・部材を組み合わせて構成されていたものと考えられる。

棺の受台は、欠失した部位もあるため、完全に復元できた訳ではないが、規格が判明した第1区や面取りした端面を持つ側面の部材等を元に復元すると、第1区は長さ49.5cm、幅72cm、第2区は長さ79.5cm、幅72cm、第3区は長さ55.0cm、幅72cmとなり、全体としては、長さ(長辺)約184cm前後、幅(短辺)約72cm前後、内法の高さ約8cm、外法の高さ約9.8cm、長短両側辺厚さ約1.2~2.2cm、底板厚さ約1.2~2.2cmの長方形の浅い箱形を呈する土製品に復元できる(図53・74、写真64、図版83)。

全体的に赤褐色の土師質を呈する精良品で、調整手法は底面及び長短両側辺の内面は全体的にハケやナデ調整が施され、長短両側辺の外面には幾重にも丁寧なヘラ磨きを施して光沢感を増している。いっぽう、底部外面(裏面)と推定される面は全体的にヘラケズリが施されているものの、部分的に成形時の布目圧痕を残すなど未調整の箇所を多く残しており、部分的に表面には見られない焼成時の黒班がみられる(図版84)。この未調整を多く残す面が表面、すなわち、棺台の上(表)面と解釈することも不自然であることから、凹状の盆状を呈する浅い箱型の土製品として認識するに至った。

棺の受台と共に出土した埴は、製作・技法的にも色調や焼成状況等が極めて類似しており¹⁶⁾、また、規格や形状も密接な関わりがあることから、何らかの規格にもとづいて作られている可能性が強く、両者はともに棺を安置するための棺台を構成する部材として共通の製作工人により計画的に製作されたものと考えられる。

平野2号墳棺の受台は、前述した大阪府塚廻古墳緑釉陶棺に見られるような漆塗籠棺の漆膜痕跡等は付着していなかったが、埴と棺の受台の具体的な使用用途としては、棺の受台が玄室中央部に構築された棺台基礎と同等の規模に復元することができたことや塚廻古墳緑釉陶棺の使用例から、玄室の床面中央部に構築された棺台基礎の上面に埴を敷き、この上に棺の受台を木棺等の棺を収納するための外容器として安置されていたものと推定される。

具体的な埴の使用枚数については、規模が判明している長辺46~47cm×短辺21~24cmのA類の埴を基準にすると、棺の受台の表面積を敷設するには、縦4枚×横3~4枚で合計約12~16枚程度の埴が必要となり、数種類の規格の埴が棺の受台の規模や形状に合うように敷設されていたものと推定される。

(4) 土製棺台の比較・検証

表11は、塚廻古墳緑釉陶棺と平野2号墳棺の受台、そして、土製棺台の参考資料として奈良県生駒郡斑鳩町竜田御坊山3号墳出土陶棺¹⁷⁾の規模等をまとめた一覧表である。規模的にみると、塚廻古墳緑釉陶棺と平野2号墳棺の受台の両者とも長辺184～190cm（推定復元）、短辺約72cmとほぼ同等の規模に復元できる。器体の厚さは、平野2号墳棺の受台に比して塚廻古墳緑釉陶棺が約1cm程度厚く、また、内面の高さは約11cm高い。構造的には塚廻古墳緑釉陶棺は、器体は均一的に一括成形されているのに対して、平野2号墳棺の受台は3分割に分割して別々に成形・焼成されているせいか、分割区域により数mm程度器体の厚さも微妙に異なる。

調整技法からみると、塚廻古墳緑釉陶棺は、内外面とも比較的丁寧なハケ調整が施されており、緑釉陶棺の表面にあたる内面に限って緑釉が施されている。平野2号墳棺の受台は、内面はハケ調整、側面外面には丁寧なヘラ磨きが施されているが、底部外面は全体的に粗いヘラケズリのみで一部に成形時の布目圧痕を残す箇所もみられる。両者とも製作技法的には、底部縁に板状に整形した粘土板を貼り付けて側面を成形していることが推定され、調整技法としては、器体の内面、すなわち、目に見える部分のみ入念に調整が施されているが、見えない部位は調整も粗く、未調整の箇所を多く残しているという共通点があげられる。

また、平野2号墳棺の受台は、3分割成形であるために棺台の中に多少水分が耐水したとしても僅かに空いた分割区域の隙間から自然に排水することが可能と思われるが、塚廻古墳緑釉陶棺は一体成形であるため、水抜孔がなければ石室内の棺台の内部に滞水した水分を排水することは難しく、両者共通の構造上の問題点として、土製の棺台は、腐りやすい有機質の棺（柩）を保護するための防湿の目的も兼ねて設置されているにも関わらず、多湿で水気の高い環境下にある石室内から湧き出す水分を除去するための水抜き孔等の排水装置がなく、防湿性に問題があることが指摘できる。

両者の土製の棺台の帰属時期については、最近の塚廻古墳の墳丘の調査で、従来の年代観を遡る7世紀中頃の築造とする見解が示されたことから、平野2号墳とあまり时期的な隔たりがない可能性も考えられる。両者の前後関係について、現段階で断定はできないが、素焼の3分割成形の平野2号墳棺の受台に比して、塚廻古墳緑釉陶棺は、一体成形で当時としては高度な緑釉が施されていることなどの製作技術的な要素から後出的で新しい印象を受ける¹⁸⁾。

表11 塚廻古墳緑釉陶棺と平野2号墳棺の受台の法量等一覧

古墳の名称	埋葬施設の規模 ・内法〔cm〕			棺の受台・陶棺の法量〔cm〕					成形技法 と構造	焼成	備考
	長辺	短辺	高さ	＜ ＞値は復元値を、（ ）値は内法値を表す							
平野 2 号墳 棺の受台	380	250	220	＜184＞	＜72＞	9.8 (8)	1.2	1.2 2.2	三分割成形	素焼 土師質	棺台低位 に埴を敷く
塚廻古墳 緑釉陶棺	240	132	132	＜190＞	72	21	2.7 3	2.3 2.7	一体成形	緑釉	棺台低位 に埴を敷く
竜田御坊山 3 号墳 陶棺 (身部)	225	71	52	157 (146)	43.2 47.8 (34～36)	25 (20)			一体成形	須恵質 黒漆塗	人骨有 身長 160cm

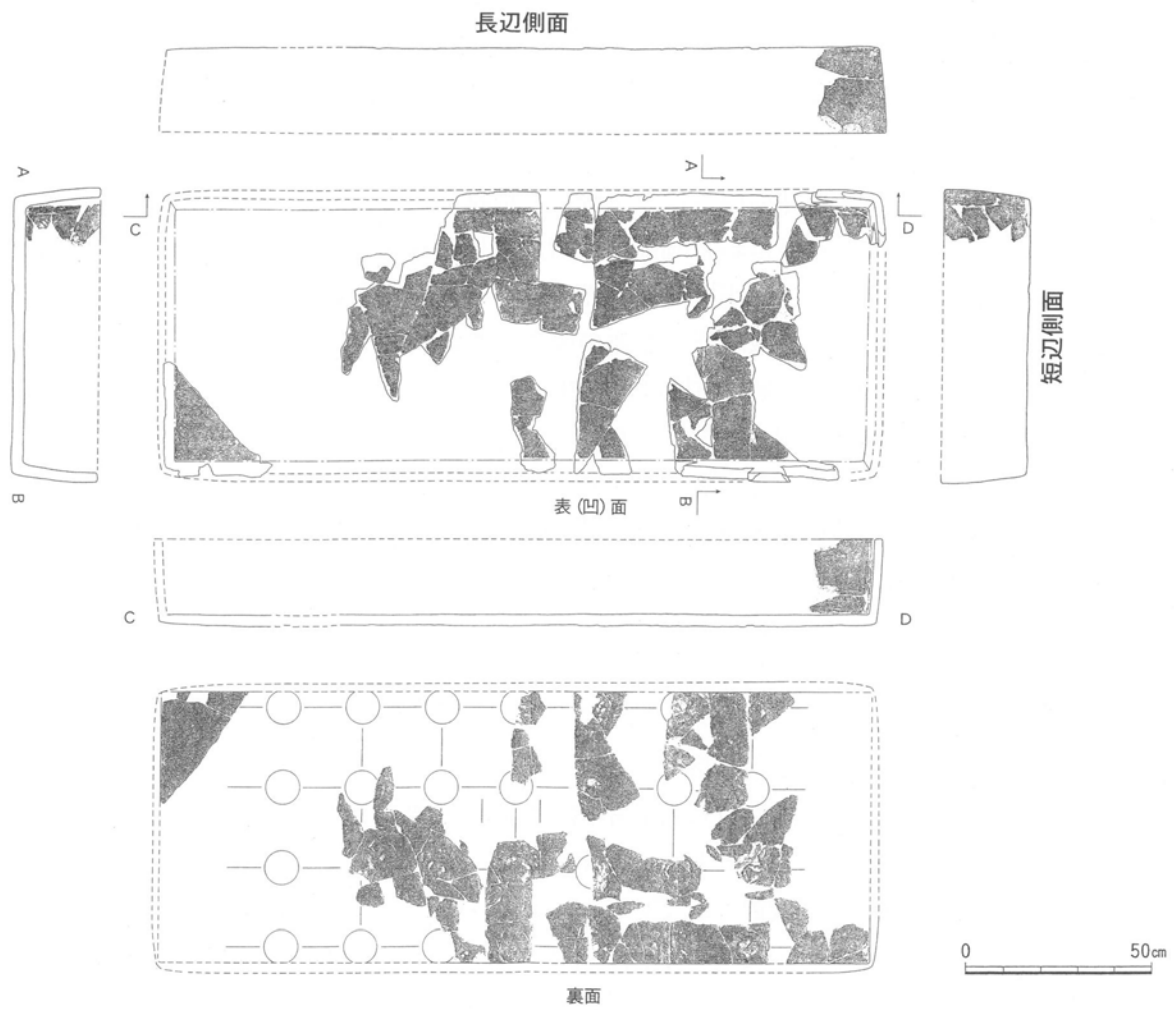


図73 塚廻古墳緑釉陶棺実測図

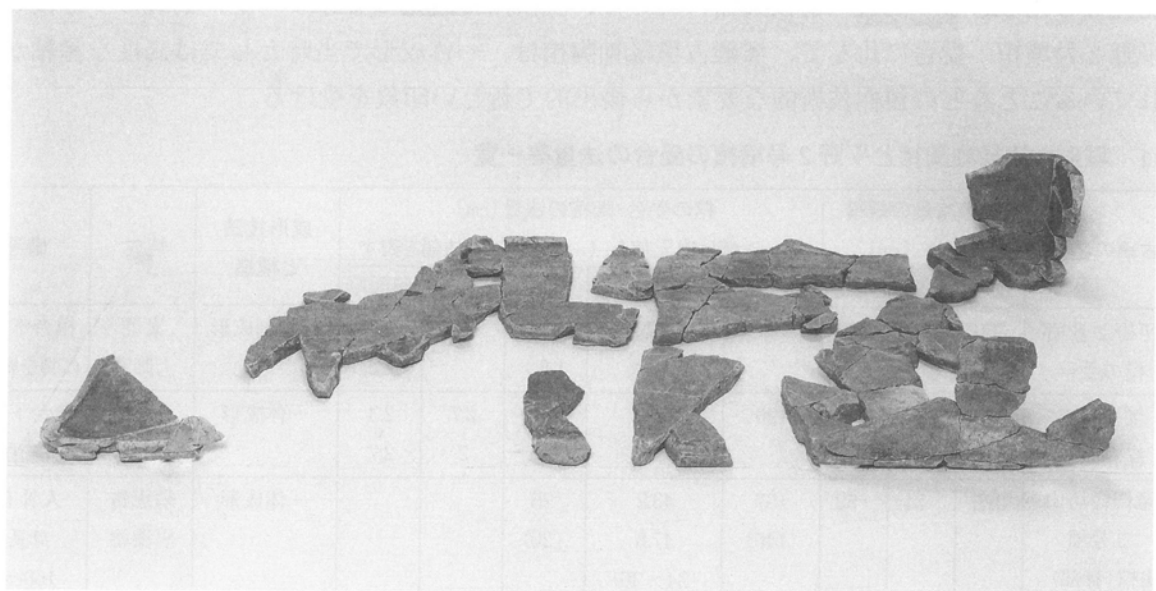


写真63 塚廻古墳緑釉陶棺全容（東京国立博物館蔵）

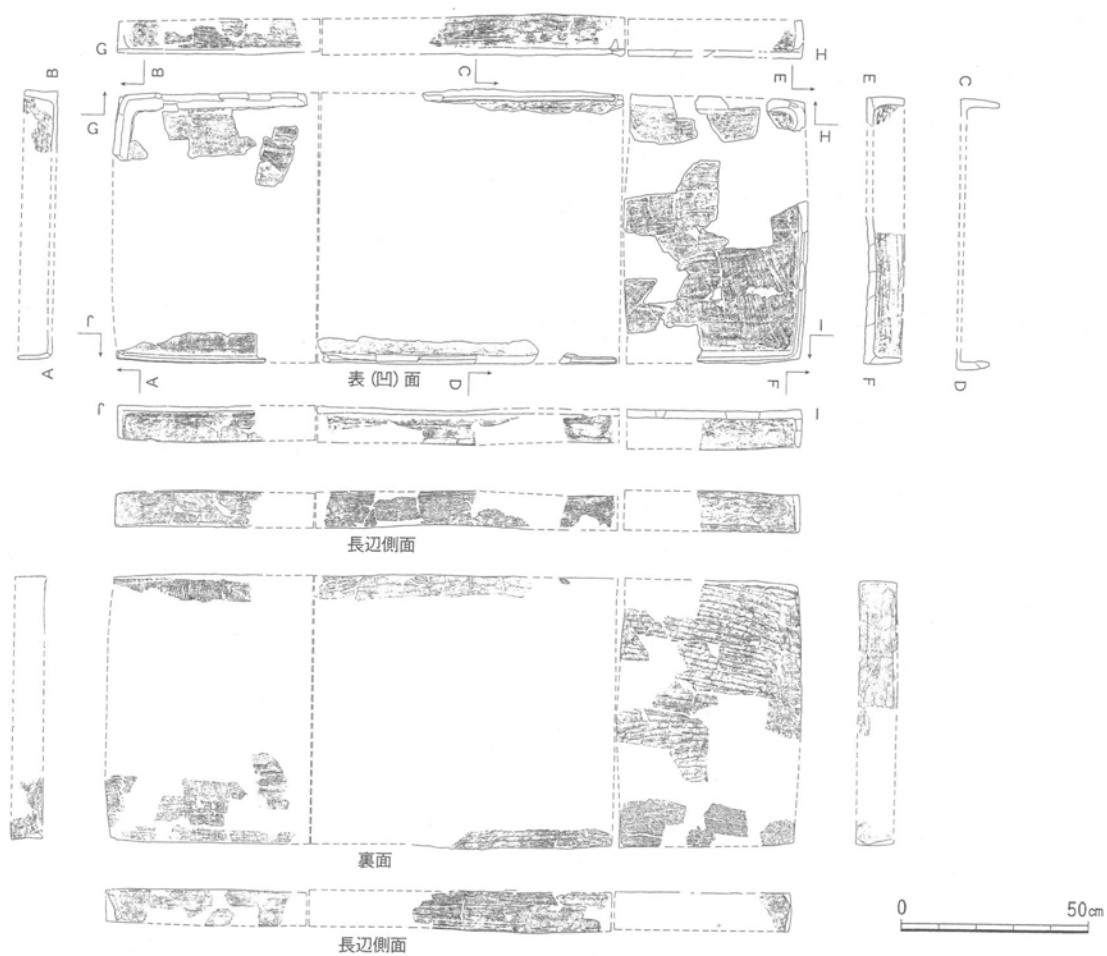


図74 平野2号墳の受台実測図

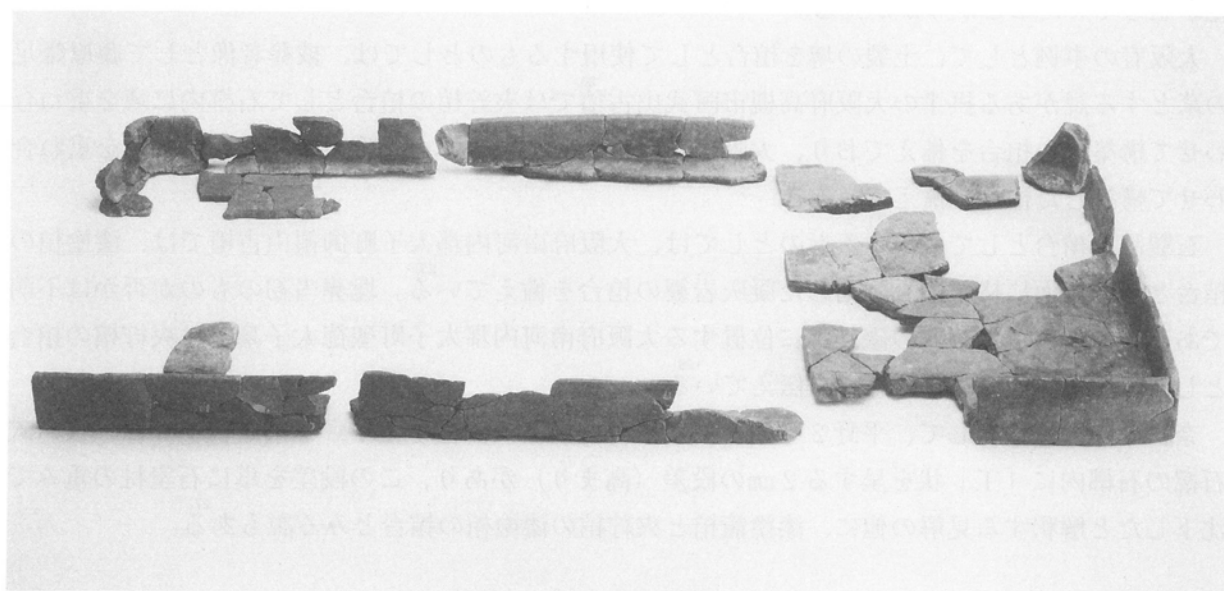


写真64 平野2号墳の受台全容

平野 2 号墳棺の受台の具体的な使用用途としては、前述したとおり、玄室床面中央部に構築された棺台基礎（土壇）の上面に高さを調節するために平板状に成形した埴を敷き、埴の上に棺の受台を外容器として置いて棺の受台の中に木棺等の有機質の棺を安置していたものと推定される（図75）。

塚廻古墳緑釉陶棺の具体的な使用方法としては、前述したとおり、北野耕平氏は、漆塗籠棺と夾紵棺の 2 種類の漆塗棺を組み合わせ一対で構成された漆塗棺の外容器（棺台）として奥室内の中央部に安置されたものと推定されている¹⁹⁾。

平野 2 号墳と棺台の構成方法を比較した場合、塚廻古墳には埴等の緑釉陶棺の棺敷に相当する部材がみられないが、北野耕平氏は、塚廻古墳の奥室床面には榛原石が多数散乱しており、前室床面にも磚状の方形に加工された榛原石の切石が 2 重に敷いて磚として使用されていた形跡がみられることから（写真66）、磚状の方形に加工した榛原石が緑釉陶棺の棺敷として使用されていた可能性を指摘している²⁰⁾（図76）。塚廻古墳と同じ平石古墳群に位置するアカハゲ古墳では横口式石槨の奥室床面中央部に長方形の棺状の大きさで漆喰が付着しており（写真65）、方形に加工された榛原石の切石数枚を重ねて漆喰で固めて棺台としていた可能性が考えられることからみても磚として榛原石の切石が塚廻古墳の緑釉陶棺の棺敷として使用されていた可能性は充分考えられる²¹⁾。

上記のことから、塚廻古墳緑釉陶棺や平野 2 号墳棺の受台の 2 者は、ともに土製の棺台の棺敷として一定の規格に加工した土製の埴や模埴石等のいずれか 2 者を組み合わせ構成されており、木棺や漆塗棺等の有機質の棺を収納・保護するための外容器、棺台の一種として機能していたものと推定される。

これらの二上山麓の 2 者の土製棺台の他、7 世紀中頃以降、棺に漆を塗布した大陸由来の漆塗棺という新しい棺材の出現・流行に伴って石室（埋葬施設）内に何らかの形で棺台を構築・設置した古墳が多々みられる。一度置けば持ち運びができない石棺に対して漆塗棺は持ち運ぶことが可能であり、単に棺の材質が変化したということのみならず、そこには葬送観念・葬送儀礼の変化が生じていたことがうかがえる²²⁾。

大阪府の事例として、土製の埴を棺台として使用するものとしては、被葬者像として藤原鎌足の墓とする説がある摂津の大阪府高槻市阿武山古墳²³⁾では夾紵棺の棺台として石槨内に埴を重ね合わせて構築した棺台を備えており、大阪府茨木市初田 1 号墳でも漆塗棺の棺台として埴を重ね合わせて構築した棺台を備えている²⁴⁾。

石製品を棺台として使用するものとしては、大阪府南河内郡太子町御領山古墳では、漆塗棺の棺台として側面に格狭間を彫刻した凝灰岩製の棺台を備えている²⁵⁾。埋葬当初のものか否かは不明であるが、二上山麓西側の磯長谷に位置する大阪府南河内郡太子町聖徳太子墓では夾紵棺の棺台として 2 基の石製の棺台の存在を伝えている²⁶⁾。

奈良県内の事例として、平野 2 号墳と同じ平野古墳群に位置する平野塚穴山古墳では、横口式石槨の石槨内に「工」状を呈する 2 cm の段差（高まり）があり、この段差を単に石室材の重みで沈下したと解釈する見解の他に、漆塗籠棺と夾紵棺の漆塗棺の棺台とみる説もある²⁷⁾。

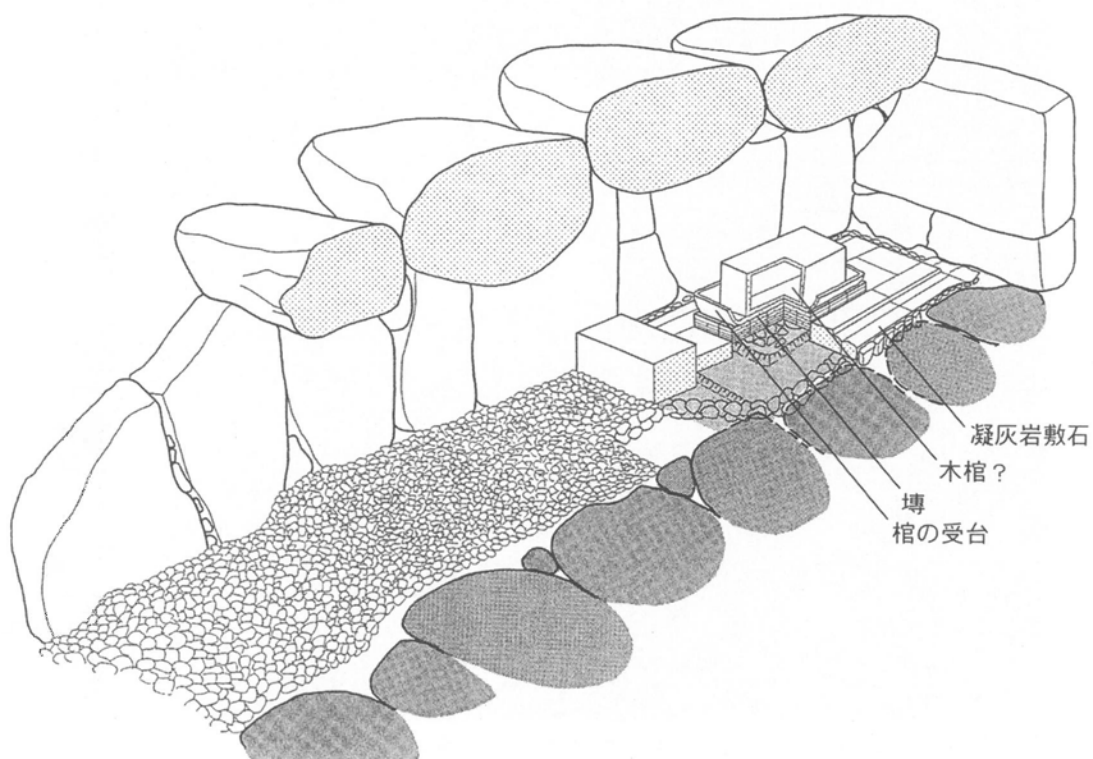


図75 平野2号墳棺の埋葬形態想像図

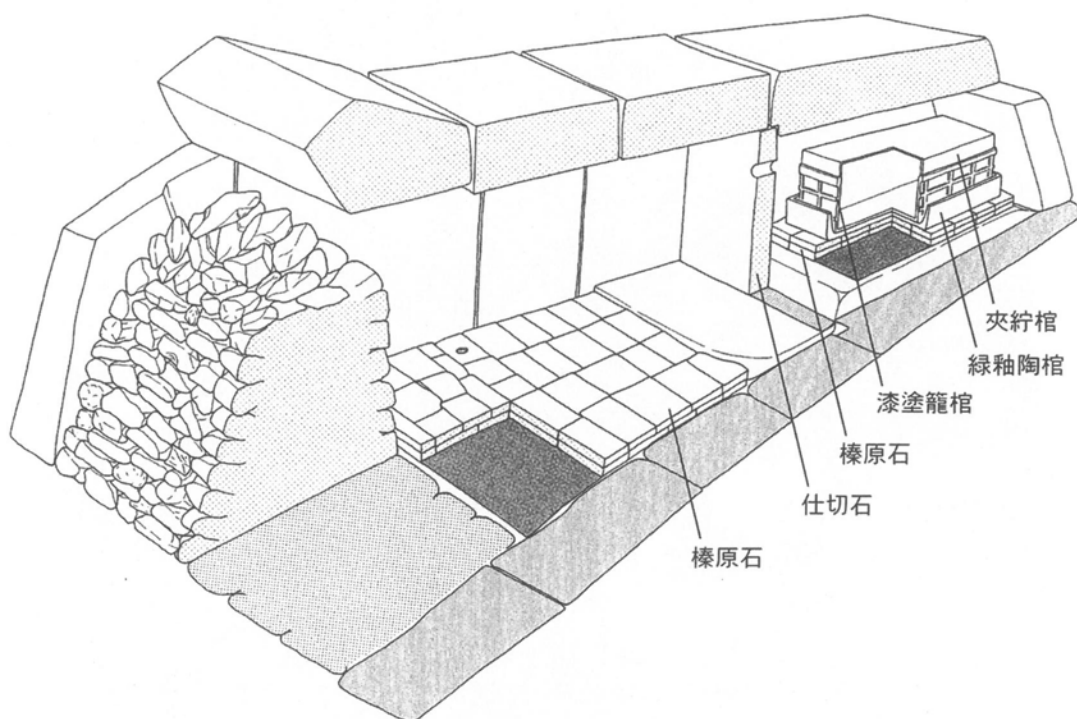


図76 塚廻古墳棺の埋葬形態想像図

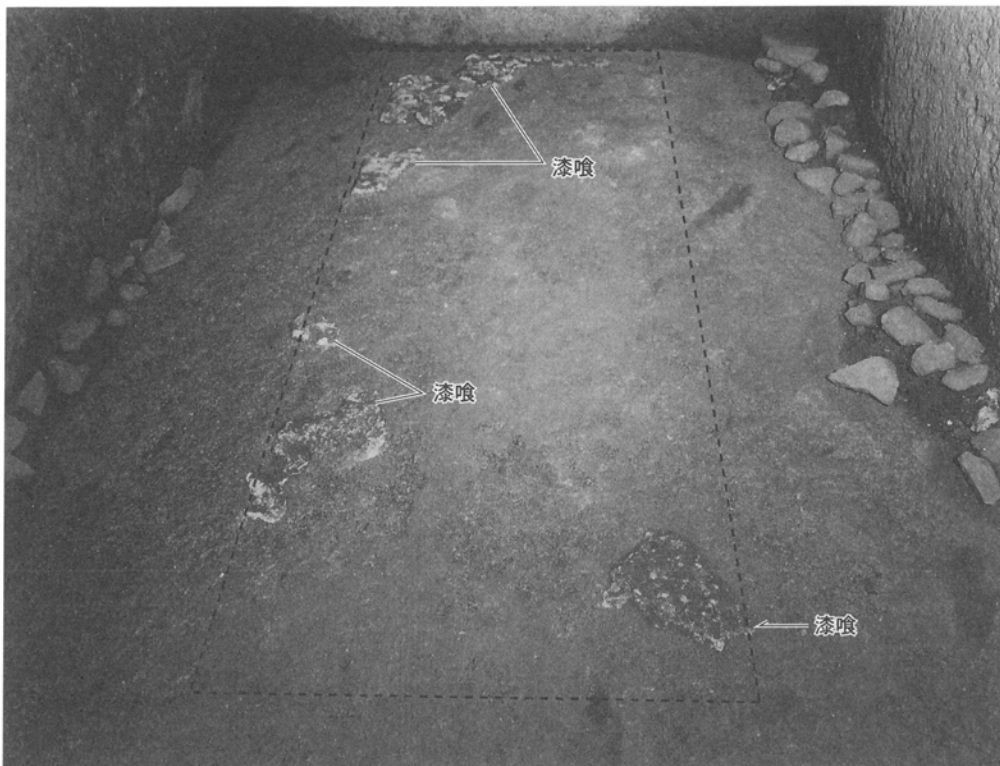


写真65 アカハゲ古墳の横口式石槨・奥室床面に付着した漆喰（北野耕平氏撮影・提供）
※破線が棺台の推定範囲



写真66 塚廻古墳の横口式石槨・前室床面の磚敷（北野耕平氏撮影・提供）

多くの皇族級の墳墓が集中する飛鳥地域では、明日香村牽牛子塚古墳²⁸⁾に凝灰岩刳拔式の横口式石槨に夾紵棺に伴う棺台が設置されており、明日香村東明神古墳では漆塗木棺の棺台として木製の棺台が想定されている²⁹⁾。また、文献史料の記録のみで実態は不明であるが、明日香村天武・持統天皇陵（野口王墓）でも天武天皇を埋葬した夾紵棺の棺台として側面に格狭間を刻んだ棺台の存在が伝えられており、持統天皇の火葬骨を納骨した蔵骨器の棺台として側面に格狭間を彫刻した金銅製棺台の存在を伝えている³⁰⁾。

これらの棺台は、ただ棺を置くための台としてではなく、漆塗棺の出現・盛行に伴って腐りやすい有機質の漆塗棺を床面の湿気等から保護することや時には見せる棺として棺を安置する空間を清浄に、そして、荘厳に演出するための視覚的な効果も兼ね備えていたものと思われる。

塚廻古墳緑釉陶棺や平野2号墳棺の受台の2者の土製棺台も漆塗棺の盛行に伴って、飛鳥時代に創出された数種の棺台の中の一形態と考えられるが、このような土製の棺台は、全国的にみてもともに二上山麓の両古墳から出土した2例以外に類例はみられない。

これらの土製棺台の系譜として、古墳時代の陶棺から派生する国内での自生発生的な見方と、飛鳥時代の墓制に大きな影響を及ぼした朝鮮半島の墓制等外的な影響からの系譜を考える見方の2者が想定される。

表12 近畿地方の棺台を持つ終末期古墳一覧

番号	古墳の名称	石室の種別	棺の種別	棺台の材質	棺台とする根拠	文献
1	平野2号墳 (奈良県香芝市)	横穴式石室	木棺?	土製(棺の受台) 埴	現物遺存 復元推定	本報告書
2	御領山古墳 (大阪府南河内郡太子町)	横口式石槨	漆塗木棺	凝灰岩製 格狭間を刻む	原位置で現物遺存	註25
3	阿武山古墳 (大阪府茨木市)	横口式石槨	夾紵棺	埴 漆喰で固める	原位置で現物遺存	註23
4	初田1号墳 (大阪府高槻市)	横穴式石室	埴	埴 埴を重ねて構築	現物遺存 復元推定	註24
5	牽牛子塚古墳 (奈良県高市郡明日香村)	横口式石槨	夾紵棺	凝灰岩製2基 石室と一体	原位置で現物遺存	註28
6	塚廻古墳 (大阪府南河内郡河南町)	横口式石槨	漆塗籠棺 夾紵棺	土製(緑釉陶棺) 榛原石	現物遺存 復元推定	註2 註6
7	アカハゲ古墳 (大阪府南河内郡河南町)	横口式石槨	漆塗籠棺 夾紵棺	榛原石 漆喰で固める	痕跡遺存 復元推定	註4 註6
8	平野塚穴山古墳 (奈良県香芝市)	横口式石槨	漆塗籠棺 夾紵棺	凝灰岩製 石室と一体	調査担当 者の見解	註11
9	東明神古墳 (奈良県高市郡明日香村)	横口式石槨	漆塗木棺	木製	調査担当 者の見解	註29
10	聖徳太子墓(上城古墳) (大阪府南河内郡太子町)	横穴式石室	夾紵棺	石製 3基の棺台	右の文献	註26
11	天武・持統天皇陵 (野口王墓) (奈良県高市郡明日香村)	横口式石槨	夾紵棺	金銅製? 格狭間を刻む	右の文献	註30

棺台の系譜については、直接的な関係はないものと考えられるが、時期や地域を無視すると形態的に類似するものとして、古墳時代前期末の福岡県福岡市鋤崎古墳の陶棺があげられる。この陶棺は、箱式石棺を模したものと推定されており、側面のみで底面を持たずに一緒に出土した平板状土製品と組み合わせて使用したものと推定されているが、これ以外に類例はなく、祖型と考えることは難しい。³¹⁾

また、同じ7世紀代の事例として、聖徳太子墓では聖徳太子と妃の膳女郎の遺骸を安置したと伝える2基の石製棺台の他に、間人皇后を埋葬した棺材として上面を浅く刳り抜いた受皿状を呈する1基の石棺が報告されている。³²⁾ 事実であれば、同じ二上山麓の終末期古墳の類例として平野2号墳棺の受台に先行することから棺の受台の祖型候補となり得るが、この棺台については、上野勝己氏のように中世の太子信仰の興隆にともなって生じた三骨一廟思想の普及にともなって石室内が徐々に改変された際に造作・配置されたものであり、石製の棺台を中世に行われた後世の造作とする懐疑的な説をとる見解もあり、³³⁾ 現在までのところ決定的な根拠がない限りその関連性を解明することは難しい。

棺の受台を陶棺からの系譜・派生を考えた場合、形態的に最も類似するものとしては、竜田御坊山古墳の須恵質の陶棺があげられる。³⁴⁾ 陶棺は、当時流行していた漆塗棺の影響を受けたものであろうか、須恵質の陶棺の表面に漆が塗布されており、通常の陶棺に比して身部の高さや裏面の脚部が低く、陶棺が退化した末期の様式を残すものである。おそらく、狭い横口式石槨に納まるようにこのような小規模な陶棺が作られたのものと推定される。帰属時期については、報告書では7世紀後半とするが、陶棺内から出土した中国製の緑釉硯から7世紀前半から7世紀中頃とみる説もある。³⁵⁾

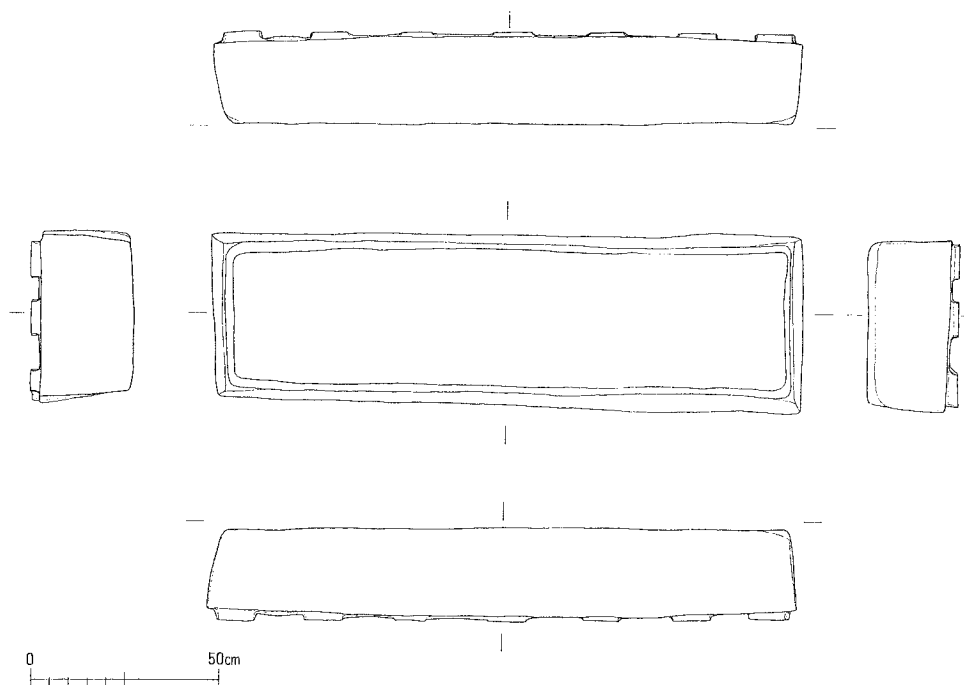


図77 竜田御坊山3号墳陶棺の身部（S=1/20）（註11文献より一部改変）

塚廻古墳緑釉陶棺身部の裏面には、前述したとおり、古墳時代の陶棺に一般的にみられる脚部を貼り付けた円形の剥離痕跡があることや表11のとおり、竜田御坊山3号墳陶棺の身部の深さが塚廻古墳緑釉陶棺身部の深さに近いことから、現段階ではこの種の棺台は、陶棺からの系譜・派生を考えることが最も自然な解釈であるものと思われるが、塚廻古墳緑釉陶棺とほぼ同時期と推定される平野2号墳棺の受台には脚部を貼り付けた痕跡が全くなく、塚廻古墳よりもさらに身部の深さが浅いため、両者の直接的な系譜を解明することは難しい。

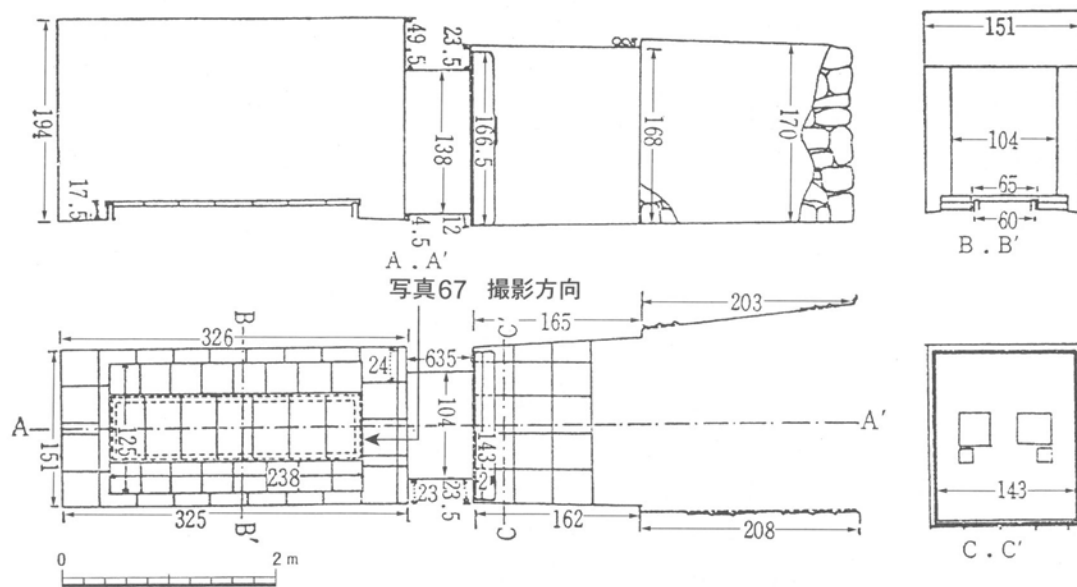


図78 陵山里東下塚古墳（註36 d 文献より一部改変）

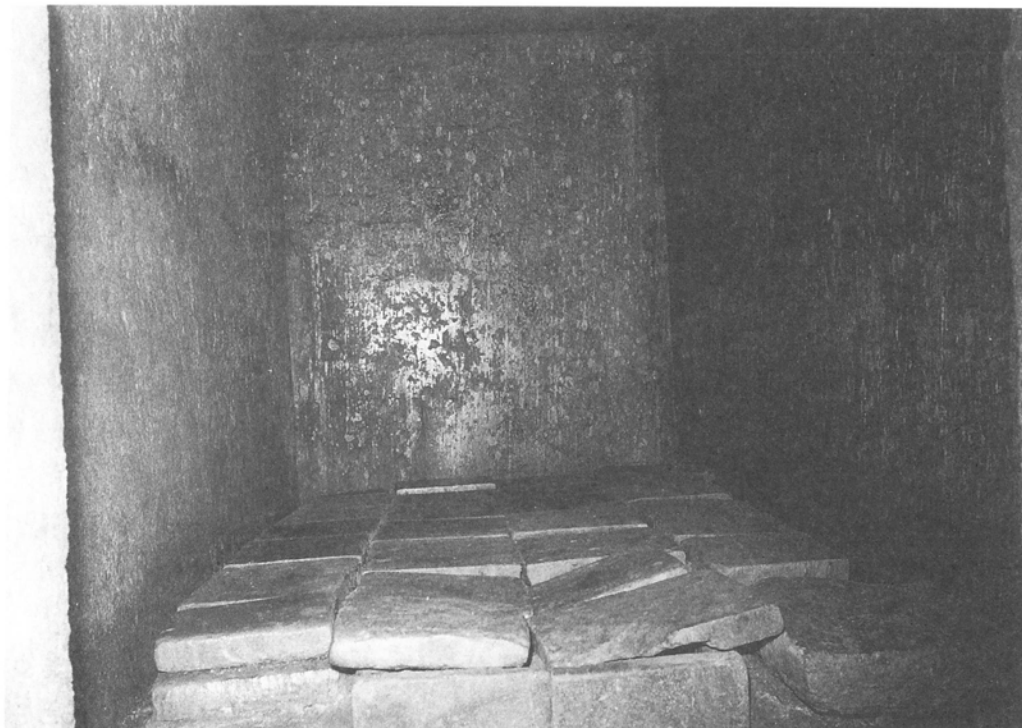


写真67 陵山里東下塚古墳石室床面の磚と棺台（北野耕平氏撮影・提供）

棺の受台を日本国外の朝鮮半島の墓制からの系譜・派生を考える場合、現在までのところ、朝鮮半島では棺の受台と同様の形状を成すものはみられないが、朝鮮半島南部の百済の陵山里古墳群や宋山里古墳群では、石室内の床面に方形に加工した土製の埴や石製の磚をはじめ板石等の切石状の工作物を敷設して棺台を構築する古墳が多々見られる。埴や磚等を敷設して棺台を構築する古墳として、陵山里東下塚古墳や宋山里第5・6・29号墳、熊津洞古墳等があげられ、板石等の切石状の工作物を設置して棺台を構築する古墳として、陵山里東上塚古墳、陵山里中上塚古墳、益山大王墓等³⁶⁾があげられる。

このうち、百済の王陵と推定されている陵山里東下塚古墳では、床面全面に磚を一重～二重に敷き詰めており、石槨中央部に設けられた棺台も磚で構築されている。図78や写真67から棺台の構築方法を観察すると、磚を数枚重ねて棺台を構築するのではなく、棺台の高まりとする部位にのみ磚の側面を縦位に配して長方形の外枠を作り、この外枠の縁に沿って磚で蓋をして棺台を構築している³⁷⁾。棺の受台と逆の構造になるが、この磚で構築された長方形の枠に底板を付ければ棺の受台と形状が似たものとなり、想像をたくましくすれば棺の受台の粗型候補の一つと考えられなくもない。

平野2号墳では、直接的に朝鮮半島の墓制と何らかの関連性を持つ考古学的資料は見られないが、同じ古墳群に属する平野塚穴山古墳の石室構造は、直接的に陵山里東下塚古墳の石室構造を模したものと考えられており、石室構築に際して朝鮮半島の墓制との関わりが想定されている³⁸⁾。

私は、南河内地域の終末期古墳に多い埴や磚等の方形状に加工した切石状の工作物を棺台とする埋葬形態の系譜は、陵山里古墳群や宋山里古墳群等を中心とする百済の墓制からの影響を考えており、間接的には平野2号墳の棺台として使用された埴や塚廻古墳の横口式石槨の前室床面に敷設された磚状の榛原石の切石等についても朝鮮半島の墓制との影響・接点があるものと推察している³⁹⁾。

2者の土製の棺の受台（棺台）は、国内で陶棺から自生的に創出されたのか、あるいは、朝鮮半島の外来的な墓制の影響を受けて創出されたのか、現段階で合理的な解釈を導き出すことは難しく、朝鮮半島を含めて今後の類例の増加を待ってあらためて検討したい。

（5）まとめ

塚廻古墳緑釉陶棺と平野2号墳棺の受台の実測成果をもとに全国的にも希少な2者の土製の棺台（棺の受台）について比較検討を行った。

塚廻古墳緑釉陶棺については、実測作業過程の中で、肉眼観察ではあるが、漆塗籠棺と同質と推定される塗膜痕が底面の内面に付着していることを確認することができ、従来からの予想通り、出土した夾紵容器と漆塗籠の2種類の漆塗製品は棺材であり、緑釉陶棺は、夾紵棺を蓋として、漆塗籠棺を身とする1対で構成された漆塗棺の外容器（棺台）として使用されていたことを再認識するに至った。また、平野2号墳棺の受台については、共伴した埴の規格から、埴と棺の受台は、棺台を構成する部材として当初から計画的に製作・使用されていた可能性があることを検証することができた。

両者の土製棺台は、規模の大小等の若干の差異があるものの、形態や使用方法等は極めて類似しており、棺を収納・安置するための外容器・棺台として使用されていたものと推定される。

とくに、平野2号墳の調査成果から埋葬施設内における土製の棺の受台と埴の使用例がほぼ解

明されたことにより、これまで北野耕平氏によって提唱されていた塚廻古墳の緑釉陶棺を夾紵棺と漆塗籠棺の2種一対で構成された棺台とする見解をより確実なものとする成果を導き出した意義は大きい。

これらの土製の棺台は、7世紀代に偶発的に何の関わりもなく突如として創出されたとは考え難く、終末期古墳の埋葬施設を構成する部材として、二上山麓の平野古墳群と平石古墳群との密接な関連性を背景として、共通の埋葬観念のもとに製作・使用されたものと考えられる。

この種の棺台の系譜については、古墳時代の陶棺に求められるのか、あるいは、全く別の系譜として、塼で構築した棺台等を多用する百済や新羅等の朝鮮半島南部の墓制・埋葬形態からの系譜を持つものなのか、合理的な解釈を導き出すことはできなかったが、現状では資料不足であり、今後、将来の研究成果の進展に委ねたい。

註

- 1) 下大迫幹洋 2001 「平野2号墳の調査成果－大和における終末期古墳の調査－」『日本考古学』32号 日本考古学協会

私は、上記文献において、これらの土製品は、一般的に古墳時代の陶棺にみられる蓋部がなく、身部のみで構成されるもので、陶棺の身部に比して内法の高さ（深さ）が浅いため、考古学用語として認識している陶棺の範疇に含めて陶棺と称することは難しいことや棺を収納・安置するための外容器、すなわち、棺台の一種として使用されていることから、その機能名から「棺台」もしくは、「棺の受台」と称することを提唱している。

- 2) 調査担当者の塚廻古墳・アカハゲ古墳調査会代表の北野耕平氏は、下記の文献において、緑釉が施釉された土製品について、陶棺にあたる蓋がなく、深さが浅いため、陶棺と称することについて疑問を持ちつつも便宜上「緑釉陶棺」と称せられている。従って、本稿では、従来からの呼称のとおり、「緑釉陶棺」と称することとする。

a. 北野耕平 1980 「金象嵌竜文大刀」『井上薫教授退官記念日本古代の国家と宗教』上巻 吉川弘文館 12頁 「平面的規模は遺体を伸展した状態で収容するに足るとはいえ、後期に盛行した陶棺に比べると著しく浅く、かつ蓋とみなすべき遺物を認めなかったため、検討すべき問題を残している。」

b. 北野耕平 1989 「大阪の終末期古墳」『シンポジウム青銅器の生産／終末期古墳の諸問題』 日本考古学協会 170頁

「緑釉の陶棺は、じつは直接遺体をおさめるための陶棺と申していいかどうか問題があります。陶棺の長さは2m内外、幅も70cmぐらいあるとう非常に大きなものです。それが漆塗の籠棺とともに奥室内に、はいていたのですが、奥室内の広さは非常に狭くて同時に並べて入れるのは不可能であるとみられます。このことから漆塗の籠棺は、緑釉の陶棺の内に納められていた、つまり、陶棺は外棺をなしていたのだとみております。これをわれわれは、磯長の聖徳太子の墓の奥壁の部分に置かれていた間人皇后の石製の浅い内剝りを上面にもつ外棺とよく一致する構造であると考えております。」

- 3) 下大迫幹洋 2003 「終末期古墳出土の土製棺台について－塚廻古墳緑釉陶棺と平野2号墳棺の受台の比較・検討－」『ふたかみ12－2002（平成14）年度香芝市二上山博物館年報・紀要－』 香芝市二上山博物館

- 4) 岡本清成・松村哲一 1968 「河南町の古墳」『河南町誌』 河南町役場 19頁

北野耕平 1970 「大阪府河南町平石第 1 号墳」『日本考古学年報』第18冊 日本考古学協会

前掲註 5 文献 34頁

- 5) 榎本哲 2003 『加納・平石古墳群発掘調査概報Ⅱ－中山間地域総合整備事業（南河内こごせ地区）に伴う－』 大阪府教育委員会

- 6) 香芝市二上山博物館編 2002 『二上山麓の終末期古墳と古代寺院－平野古墳群と尼寺廃寺跡－』 香芝市二上山博物館

当文献には、北野耕平氏により、塚廻古墳とアカハゲ古墳の詳細な調査報告とともに両古墳の石室の実測図面が掲載されている。この他、塚廻古墳の調査の概要については、前掲註 2 a・2 b 文献等に調査の概要が報告されている。

- 7) 大阪府教育委員会編 2005 『ツカマリ古墳発掘調査現地説明会資料』 大阪府教育委員会文化財保護課

- 8) 前掲註 6 文献 28－29頁

- 9) 前掲註 3 文献 60頁

- 10) 下記文献を基に加筆・作成した。

a. 塚口義信 1991 「平野塚穴山古墳の被葬者について－いわゆる大化の薄葬令の問題を中心として－」『有坂隆道氏古希記念日本文化史論集』 同朋社 111－114頁

b. 塚口義信 1994 「大化の新政府と終末期古墳－いわゆる「大化の薄葬令」と横口式石槨－」『堺女子短期大学』第29号 愛泉学会 47－50頁

- 11) 泉森皎・猪熊兼勝 1977 『竜田御坊山古墳 付 平野塚穴山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32冊 奈良県教育委員会 84－85頁

上記文献の中で、猪熊兼勝氏は、藍胎と夾紵の 2 者の漆塗製品の用途について、①夾紵を棺材とし、藍胎を副葬品か副葬品の容器とみる説。②夾紵棺が身で、藍胎を蓋とする説。③藍胎棺に夾紵の棺台、もしくは、外棺とする説。④棺の外枠を夾紵で作し、壁面を藍胎で作ったとみる合成棺とみる説。の 4 つの見解を示されており、2 種類の技法を組み合わせる 1 棺を構成されたものと推定されている。

- 12) 前掲註 6 文献 29頁

- 13) 前掲註 3 文献 63－67頁

- 14) 下記文献に仏陀寺古墳等の南河内地方の終末期古墳から出土する埴には十文字の割付線を線刻するものが多々みられることが指摘されている。

鍋島隆宏 1999 「仏陀寺古墳出土の埴について」『太子町立竹内街道歴史資料館館報』第 6 号 太子町立竹内街道歴史資料館 63－73頁

塚廻古墳緑釉陶棺の底部裏面に施されている格子状の割付線は、製作にあたった工人の意匠・技法として、脚部を正確に均一的に設置するための目安として刻まれたものと推定されるが、仏陀寺古墳等の埴にみられる十文字の割付線と何らかの関連性がある可能性も考えられる。

- 15) 平野 2 号墳から出土した棺の受台については、本報告書本文102－105頁で詳述している。

- 16) 棺の受台と共に棺台を構成する平野 2 号墳から出土した埴については、本報告書本文92－101頁で詳述している。

- 17) 前掲註11文献 2－40頁

- 18) 前掲註 3 文献を執筆した時点においては、塚廻古墳の帰属時期は 7 世紀後半とする見解が主流を占めていたため、7 世紀中頃と推定される平野 2 号墳棺の受台が塚廻古墳緑釉陶棺よりも先行し、土製の棺台とし

ては先駆形態となる可能性を指摘した。近年の塚廻古墳の墳丘の発掘調査により、塚廻古墳の築造時期が平野2号墳と同時期の7世紀中頃まで遡る可能性があることが判明したが、確実に緑釉陶棺が国産品であるという前提に立つならば、この見解は変わらない。塚廻古墳の緑釉陶棺については、国内の緑釉の初源を検討する上でも重要視されており、今後の研究の進展に従って改めて検討したい。

19) 前掲註2 b 文献、前掲註6 文献

20) 前掲註2 a 文献の中で北野耕平氏は下記の通り述べている。

「とりわけ奥室内部は最も盗掘を蒙っていた部分で、床面に若干の漆塗籠棺と緑釉陶棺の破片とが、棺台を構築していたかとみられる大量の榛原石の板石片と共に混在し、中にガラス製扁平管玉片も認められた。」

21) 岡本清成・松村哲一 1968 「河南町の古墳」『河南町誌』 河南町役場 19頁

北野耕平 1970 「大阪府河南町平石第1号墳」『日本考古学年報』第18冊 日本考古学協会

前掲註6 文献 34頁

22) 和田晴吾 1995 「棺と古墳祭祀－「据えつける棺」と「持ち運ぶ棺」－」『立命館文学』542 立命館大学

23) 梅原末治 1936 『摂津阿武山古墓調査報告』大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第七輯 大阪府

原口正三 1973 「阿武山古墳」『高槻市史』第6巻 考古編 80－84頁

24) 中井貞夫 1972 「初田1号墳調査概要」『節・香・泉』第11号

初田1号墳塹のほか、大阪府内の終末期古墳から出土した塹の調査に際しては、小浜成氏（大阪府教育委員会）のご協力とご教示を得た。

25) 水野正好 1972 『近飛鳥遺跡分布調査概要Ⅱ』 大阪府教育委員会

26) 梅原末治 1914 「聖徳太子磯長の御廟」『聖徳太子論纂』 平安考古会

聖徳太子墓の玄室内には、玄室の前方東側の聖徳太子と前方西側の妃膳郎女の遺骸の安置所として2基の石製棺台の存在を伝える。

27) 註11文献では、石槨内中央部床面の工字形に2cm突出した高まりを当初からの棺台の工作物とみるか、側壁・天井石の加重によって側壁に接する床石が沈下したことにより、偶発的に生じたものと解釈するか、調査者・報告者の間で見解が分かれている。

猪熊兼勝氏は、前掲註11文献84頁で、「平野塚穴山古墳の2cm高い切石は、牽牛子塚古墳の2cm高く削り出された棺台と同性格をもつものであり、この工字形切石は構築時に意識された棺台としての施設であろう。」と記しており、棺台と認識している。

28) 網干善教他 1977 『史跡牽牛子塚古墳』 明日香村教育委員会

29) 河上邦彦 1999 『東明神古墳の研究』高取町文化財調査報告第18冊 高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 67頁

終末期古墳の棺台として、石製や土製品の棺台以外にもこのような木製の棺台が存在していた可能性も充分考えられる。

30) 秋山日出雄 1979 「檜隈大内陵の石室構造」『橿原考古学研究所論集』第5 奈良県立橿原考古学研究所

31) 加藤一郎ほか 2002 『鋤崎古墳2号墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集 福岡市教育委員会 99頁、115－117頁 直接的には箱形石棺を模したものと推定されているが、このような土製品の類例は他にみられない。

- 32) 前掲註26文献。北野耕平氏は、この間人皇后の石棺について、前掲註2 b 文献において、石棺の上面に施された浅い刳抜が塚廻古墳の緑釉陶棺の形状と類似することから、その祖型となる可能性を指摘されている。
- 33) 上野勝己 1996 「聖徳太子墓を巡る動きと三骨一廟の成立」『太子町立竹内街道歴史資料館館報』第3号
太子町立竹内街道歴史資料館
上野勝己氏は、間人皇后の石棺について、具体的には手水鉢の転用である可能性を指摘されている。
- 34) 前掲註11文献 2-40頁
- 35) 河上邦彦 1995 『後・終末期古墳の研究』 雄山閣 120-121頁
- 36) a. 梅原末治 1938 『昭和十二年度古蹟調査報告』 朝鮮古蹟研究会
b. 軽部滋恩 1946 『百済美術』 宝雲舎
c. 関野貞 1948 『朝鮮の建築と芸術』 岩波書店
d. 金基雄 1976 『百済の古墳』 学生社
e. 姜仁求 1977 『百済古墳研究』 一志社
f. 有光教一 1979 「扶余陵山里伝百済王陵・益山双陵」『橿原考古学研究所論集』第4 奈良県立橿原考古学研究所
- 37) この方法であれば棺台内部が空洞となり、やや不安定であり、塼がずれると枠内に落ち込む可能性があるため、内部に土を充填して棺台基礎を構築していた可能性も考えられる。
- 38) 前掲註11文献
- 39) 下大迫幹洋 2003 「奈良県平野古墳群をめぐる二、三の憶説」『続文化財学論集』 文化財学論集刊行会